

原発災害 「復興」の影

■ 今を問う ⑧

「正直な話、がっかりして痛ってきた」。葛尾村長の松本允秀(76)が話すのは2004(平成16)年の中越地震で被災した新潟県長岡市山古志地区(旧山古志村)を視察した感想だ。急速に進んだ。地元関係者は支援事業の削減や縮小が進む見通しだ。

同地区では、被災した幹目にはそう映らなかった。なごるはずだが、松本の地区は、帰村のモチルにもなると言われたことが、全村避難を経て復興した姿が「奇跡」ともいわれた。松本の耳に残った。

同地区では、被災した幹

線の国道21号が1年10カ月で通行可能になるなど、迅速に復旧が進んだ。ただ、都市部に避難した若者らが戻らず移住が進んで、地区の人口は被災前の半数の150人に激減、高齢化も

事業削減縮小進行へ。象外となった。「国はもう、復興という考えでなく、

「国の復興支援10年」

中越地震の例に募る不安

地域振興をどうするかとい

復興支援員の雇用助成などで被災者を支援する公益財団法人・中越大震災復興基金(戦略部長の渡辺則道(51)は、事情を明かす。

山古志地区では医療機関には以前のように頼れず、

震災機に別々に暮らす長男

「国はもうあるように感じられ、」

避難解除急がせる国

「み得られるか。被災後3年余

せているけど、外の人にも

松本は「福島は放射能の

「国が既に助成の対



山古志の復興の象徴とされた国道291号の橋。10年を経て、人口減など課題が表面化している

(文中敬称略)